

城下町として賑わう

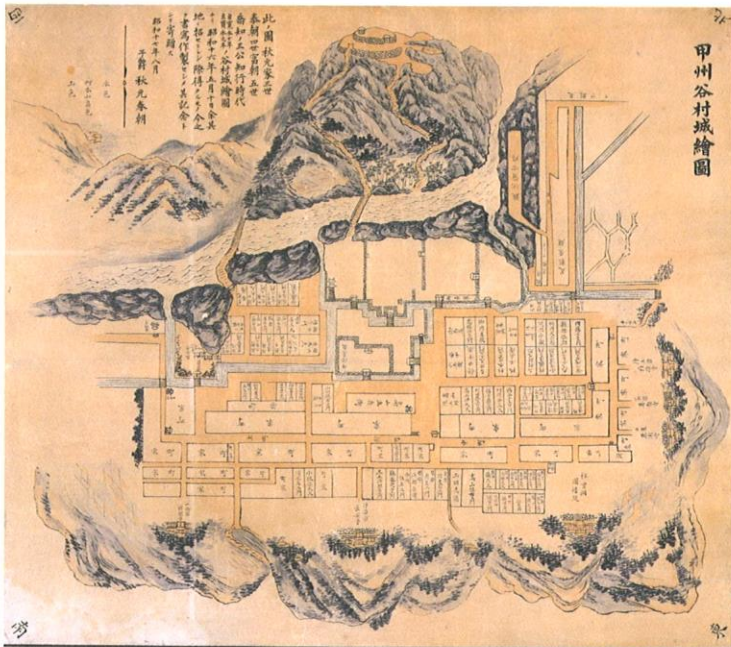
本能寺の変で信長が横死すると、甲州は徳川家康の支配するところとなりますが、北条氏がいち早く郡内領に進攻し、谷村館へ入って御坂・笹子両峠から国中に攻め入り徳川方の鳥居元忠と一戦を交えています。「黒駒合戦」といわれるこの戦いで徳川軍は大勝利、和議が成立。こうして徳川家康が甲斐一国を領有することとなり、天正十年（一五八二）にはその戦功により鳥居元忠が都留郡一万八千石の領主になります。

その後、豊臣政権下での羽柴・加藤・浅野の支配を経て、慶長六年（一六〇一）鳥居成次が父の旧領を賜り谷村城主となります。しかし徳川家光の弟忠長の家老となったために将軍後継争いに巻き込まれ、寛永十年（一六三三）、成次の子の成行のときに所領没収となり、鳥居氏の都留郡支配は終わりを告げます。

鳥居氏に替わって配置された秋元泰朝から、宝永二年（一七〇五）の秋元喬知の川越転封までの七十年余秋元氏の支配は続き、その後は幕府領地として柳沢吉保の預かり地支配となり、享保九年（一七二四）以降は幕府直轄領となります。



●勝山城
谷村城の背後を固める山城で「お城山」とも呼ばれる。現在なお、曲輪・堀・石垣・土塁など多くの遺構が認められ、当時の威容を偲ばせている。



甲州谷村城繪圖

●宝永城下絵図
絵図を見ると、城郭部分を取り囲むようにして家老・槍奉行・旗奉行・使者役・番頭などの重職層の屋敷地があり、山際には江戸の大火で焼け出された芭蕉が滞在したとされる城代高山伝右衛門の広大な屋敷が目立つ。



小山田氏が居館を構えた谷村は一貫して都留郡支配の中心地となってきましたが、加藤氏・浅野氏の時代には桂川左岸に居館と家臣居住地が形成されていたと考えられます。しかし、早ければ浅野氏の時代遅くとも鳥居成次の時代に、家臣居住地が桂川右岸へと変更されたことをきっかけに、宝永二年（一七〇五）の城下絵図に描かれる姿へと城下町谷村は発達を遂げることになりました。

谷村城は現在の谷村第一小学校に位置し、桂川に内橋を架けて背後の勝山城と連絡していました。谷村城の正面には大手通りがあり、大手通りをはさんで上谷村、下谷村に分かれ、市内には現在も早馬町、鍛冶屋坂、城の腰など城下町特有の地名が残っています。

また、将軍献上の宇治茶を江戸へ運ぶ「茶壺道中」の茶の一部を、承応元年（一六五二）谷村城主秋元富朝の時代、勝山城の茶壺蔵へ保存して、暑気の最中冷気をあて、涼風が吹く頃に江戸城に運んだという記録もあります。当時、將軍のお茶を預かるということは極めて責任が重く、それだけ秋元氏に対する信頼が厚かったと推測されます。